

自然迹門を所依として、此れに對する權教を破するなり。所顯の如く、迹門の教に依て理具の實相を明す、此れ自然教理の二方面に分るるなり。迹化の理談は迹門の十如實相の文に依て、彼の三千の法相は、十界互具を以て其詮とするなれ共、其の十界互具は、必ず十如に依て起る故也。吾祖彼の理觀を示すに十如と共に欲令衆生開佛智見の文を擧げ給ふは、唯衆生心具の旨を顯はさんが爲也實相の理は已に十如に依て顯はると雖も、之れを唯佛陀智見の境に託するのみにして、衆生の解に約するに非らず、廣開に至り佛欲令衆生開佛智見と説くに及び、衆生始めて心具の旨を領する也。之れを以て實相を顯説する事は、十如の妙境に如くは無し、心具分明なる事は開佛智見の文に如くは無しと知るべきなり、次に理を云はゞ理具の三千則ち其の一念は、凡夫の根塵相對介爾生滅の一念を云ひ、實に事相微細也と雖も、理性に三千の諸法を具して缺減無し、而して宗祖は此の教理を以て般若涅槃の三時教花嚴の五教十宗眞言の十住

心論等を破するなり、殊に花嚴の別教一乘同教一乘等の立方を破する也。(以下次號)

### 論妙法五字與三大秘法關係

藤田光肇

天、總論

宗教とは宇宙の神秘を開出して、専ら人心の奥底を支配するものにして、眞に國家經倫の根本、世界文明の源泉とも稱すべきものは也。

而して諸宗教中三千有餘年昔、南方亞細亞中印度に降誕せられたる、大聖釋迦牟尼の開き給へる佛敎は、内に八萬四千の法門を含し、外に衆生救濟の力を有する、最勝無二の宗教也。

一言に佛敎と稱するも、敎宗多種、所謂小大偏圓顯密權實本迹等の別ありと雖も、實に佛敎の眞髓を説けるものは唯一乘のみありて、二も無く亦三も無き也。

五綱判敎に依て、一代聖敎の淺深を明め、滅後

の諸宗の勝劣を判じ、以て撰擇せられたる佛教の眞髓、唯一絶對の宗旨とは何ぞ、則ち法華經本門壽量品の肝心たる、妙法五字こそ是れ正しく末法當今本因下種の宗旨なれ。

今末法に入りぬれば餘經も法華經も詮かし、但南無妙法蓮華經あるべし。(續遺一七一七部)

妙法五字は、實に本宗教門の極致にして、又觀門の樞要也。而して此五字を行門(妙解は五綱)に約して開立せられたるもの則ち三大秘法ありとす故に三大秘法と云ふも、妙法五字と稱するも、其法の本體に於ては異なること無し。但卷舒の相違あるのみ。

三大秘法とは、則ち本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇是也。此三秘各本門の語を冠する所以は、一往は迹門に擇ぶが爲め也と雖も、再往之を論ずれば、塔中別付、上行所傳の大法の深勝あるを顯し給ふ也。當に知るべし、吾祖所弘の三秘は待對すべきなく、絶對不思議の三秘也。正像に未だ曾て、かゝる法門無し、故に秘法と云ひ、三即

一あるが故に秘法と云ふ也。

此の三大秘法は本佛久證の妙法、壽量觀心の大教にして正像未弘の正法、本化獨創の妙説也。是れ正しく、本宗行門の三大要素也。

故に此三大秘法は、宗學上重要な地位を占むるものにして、實に宗旨の大綱領をなすもの也。妙乘の學人、最も精研せざんばあるべからず。乃ち吾人不肖を顧みず妙法五字と三大秘法との關係を論究せんとする所以也。

本論に於ける、先づ妙法五字の法體を明し、次に進んで三秘の形顔、及體相に及ぶ。形顔の章下に在ては、『報恩抄』所顯の三秘に依つて、横に約して三秘を論じ、體相の章下に於ては『三秘抄』所説の三大秘法に就て、豎に約して之を究めんとする也。次に末法の機根の章に於ては、總じて滅後の三時、別しては末法の機根と得益の教を示す次は妙法五字と三秘との交渉を説き、尙進んでは機根と五字及び三秘を述べて、最後妙法五字に歸着するの旨を明するもの也。

政公云ク『設ヒ暗スル一代經ナラ如キ文殊等ノ不レ識ヤ』  
以テ法華ノ文ヲ結スル題目ノ五字ハ不レ足レ爲ニ末法弘  
通之師ト矣『草山集』『刪』一「序九丁引之」

地、本論

第一章 妙法五字の法體

第一節 題目ノ一部

五玄具足妙法蓮華經の五字は、是れ法華經の眞髓、本地甚深の奧藏也。

題目は總にして、一字は別也。又題目は所顯にして、一部は能顯也。能顯は別文は能く總要を顯すと雖も、別文自ら限量あり、總要の妙法は別文の一部に依て顯るゝと雖も、所顯の玄理は無窮也。凡そ八萬法藏の廣きも一部八卷の多きも只是れ五字を説かんが爲也。靈山の雲の上鷲峰の霞の中に釋尊要を結び、地涌付囑を得ることありしも法體は何事ヲ只在ニ此要法ニ (縮遺五七七部)

されば日月燈明佛は六十小劫此妙教を説き序品大通佛は、是れをく説こと八千劫也。(化城喻品)

今番出世の釋尊は『壽量品』に於て其正宗を顯説し更に滅後末法流通の爲め、『神力品』に至り、四句の要法に結んで、上行等に付囑して宣はく

若シ我レ以テ是ノ神力ヲ於テ無量無邊百千萬億阿僧祇劫ニ爲シ囑累ニ故ニ說ニ此經ノ功德ヲ猶不能レ盡ス

と以て知るべし、所顯の總要に無邊の功德を含有することを。故に徳用の邊に約する時は妙法五字と法華經一部に勝劣あるべし。

然れども法の本體に約する時は、二者全く異ならず。總は別を總し、別は總を別すれば、唯一體なるべき也。

佛智の及ばぬこと何かあるべき、されども法華の題名受持の功德ばかりは是を知らずと宣たり法華一部の功德は只妙法等の五字の内に籠れり一部八卷廿八品文ごとに生起かはれども、首題の五字は同等也。(縮遺五七九部)

總別徳用には勝劣あれども、法體に就ては無別なること明けし。而して末法當今の衆生は、孰れに依るべき歟と云ふに、

一部八卷廿八品を受持し、讀誦し、隨喜護持するは廣也方便品壽量品等を受持し等するは略也但一四句偈乃至題目計りとなうる者を、護持するは要也。(縮遺五八六)

而して吾祖立宗の生命は、實に廣略の法華に非ずして、要中の肝要たる妙法五字に在る也。

日蓮は廣略を捨て、肝要を好む、所謂上行所傳妙法蓮華經の五字也。(縮遺一〇四二)

此等の祖文に依りて宗祖の御本意を窺ふに、本宗の正意は一部に非ずして、妙法五字の題目に在ること明けし。

第二節 付囑の起盡

教主釋尊在世化導の大事既に終局を告げ、滅後の爲めに像法の利機に對しては、一部を取て、通じて迹化藥王等に付囑し給ひ、末法の鈍根に對しては、殊更に其弘通に堪ふべき本化上行等に結要五字の妙法を以て、別して付囑し給ふ。其別付囑の儀相を云はば、寶塔品に事起り、壽量品に事顯れ神力囑累に事竟る也。

即ち『寶塔品』に事起るとは、唯能於此娑婆國土廣說妙法華經佛欲以此妙法華經付囑有在の文に依りて、事起る也。

『壽量品』に事顯るとは、依諸經方求好藥草色好美味皆委具足擣篩和合與子令服乃至是好良藥今留在此の文あるべし。是れ即ち五支具足の妙法にして、正しく末法弘通の法體、本化所囑の大法也。

『神力』『屬累』に事竟ると云ふは、壽量品所顯の妙法を結要して、本化上行等に別付囑し給ふは、是れ神力品にして、爾時佛告上行等菩薩大衆乃至宣示顯說の文に依つて明かあり。其別付囑竟つて一會の大衆に總付囑をかし給ふ、是れ囑累品にして、爾時釋迦牟尼佛從法摩起乃至付囑汝等の文に依つて瞭々たり。

之を要するに、本佛が本化に對し、殊に末法我等の爲めに、正しくは要の題目、兼ねては法華經一部を付囑し給ひたることは、即ち槓言すれば付囑の起盡は、前にも擧げたる如く、寶塔品の時事起り、壽量品の時事顯れ、神力囑累の時事竟るの

一言にして足れる也。

第三節 三時の異相

正像末四依の弘經、本化と迹化と内鑑に於ては同致なりと雖も、外用に於ては小大權實迹本等各々異なる也。今題目に於ける亦然り、佛滅後三時の弘經殆ど應病與藥の如し、正像には衆生の心病未だ輕きが故に、その法藥も小權迹等の輕藥にて足れりと雖も、末法に至りては、衆生の心病甚だ重きが故に、本門の大良藥たる妙法五字に非ずんば、之を治すること能はず。

然るに正像の中と雖も、龍樹、天親、天臺、傳教等本門の題目に於て内鑑なきにあらず、但外時宜に適はざるが故に、専ら權迹を弘む、其題目に於ける、但經の名として取扱ひたるが如し。

天臺、佛敎の如きは、盛に法華經を講説したれども、唱題を奨めず、但自行に止りて廣く化他に出でず、然るに吾祖は大に前代に異なる也。自ら之を行ずるのみならず、廣く他に及すを以て一宗の生命とせられたり。

題目者有二意所謂正像與末法也。正法には天親菩薩龍樹菩薩題目を唱へさせ給ひしかども、自行ばかりにしてさて止ぬ、像法には南岳天臺亦題目計り南無妙法蓮華經と唱へ給ひて、自行の爲にして廣く他の爲めに不説、是理行の題目也。入末法今日蓮が所謂題目異前代互自行化他南無妙法蓮華經也。名體宗用敎の五重玄の五字也。

(縮遺二〇五三)

此御文に依つて、正像末三時の題目相巽に二義あるを知るべし。一は自他の通不、二は五玄の具不也。即ち彼は自行内鑑の義あるも外顯に説かず、但名玄とするが故に、餘の四重隱るゝ處あり。又他の爲めに奨めず、故に理行と云ふ。我は自他を隔てず、そののみならず、法體陰るゝ所なし、故に事行と云ふ也。

第二章 三大秘法の形顏

第一節 本門の本尊

總論に於て一言せし如く、本章下に在りては專

ら『報恩抄』に依りて其外面の形顔を明すもの也其内容及深秘の義門は、三秘體相の章下に至りて説く處あるべし。

求めて云く其形顔如何 答て曰く一には日本乃至漢土月氏一閻浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし、所謂寶塔の内の釋迦多寶外の諸佛並に上行等の四菩薩脇士とあるべし。

此れ即ち本門の本尊の形顔あるべし、尙其形顔を示されたるは、

是れ全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛摺形木たる本尊なり。されば首題の五字は中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に座し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ、普賢文殊等舍利弗日蓮等座を屈し、日天月天第六天の魔王龍王阿修羅其外不動愛染は南北の二方に陣を取り惡逆の達多愚痴の龍女一座をはり乃至總じて大小の神祇等體の神つらある其餘の用の神豈に漏るべきや等云云。(縮遺一六二五)

等の祖文に依りて、本門の本尊の形顔窺ひ知るべ

きなり。

## 第二節 本門の戒壇

天台叡山の戒壇は、迹門の理戒あり。是れ専ら理觀に基くが故なり、然るに當家の戒壇は本門の事戒なり、是れ専ら事觀に基くが故なり。

今末法に於ては建長五年四月廿八日千光山頂、立教開宗の道場に始り、已來宗祖及び弟子檀那の居住せられたる處、及び如法弘通の道場は茅宇草堂と雖も、既に是れ本門の道場にして即ち是れ戒壇なり。

『神力品』の『汝等於如來滅後中路若於園中若於林中乃至而般涅槃』等と宣へる佛意の所在知るべし。

而して我祖棲神の靈閣たる當身延山の如き、一宗授戒の根本道場として、大權威を有すべきものあり。(智公の戒壇義必見)

## 第三節 本門の題目

本門の題目の形顔とは如何なるものぞ、即ち祖

意を窺ふに、

日本乃至漢土月氏一閩浮提の每人有智無智を簡  
ばず一同に他事を廢て、南無妙法蓮華經を唱ふべ  
し。  
(縮遺一五〇九)

檀戒等の五度を制して、一向に南無妙法蓮華經  
と稱せしむ中畧是れ即ち此經の本意なり。

(全一五四〇)

今末法に入れぬれば、餘經も法華經も詮かし但  
南無妙法蓮華經あるべし。  
(全一七七一)

此等の祖文に依つて案ずるに、末法當今の衆生  
は、有智も無智も、賢愚共に唱題をのみ致すべき  
なり。是れ即ち本門題目の形顔なるべし。

### 第三章 三大秘法の體相

#### 第一節 本門の本尊

當家信仰の對境、諸尊統總の標的にして、即ち  
南無妙法蓮華經の五字七字是あり。

其法體たるや、人に約すれば、題目の名に依つ  
て顯されたる無作三身、久遠實成教主釋尊を中心

として、十界勸請の大曼荼羅あり。法に約すれば  
天地の心理、萬教の總要、一部の都名たる、無作  
の圓理、久遠の本法、今番の妙法を總要として十  
界勸請の大曼荼羅是れなり。

更に要を以て之を言はゞ、本法の名を以て顯れ  
たる唯一本佛即ち是れ本尊の正體なり。  
而して本門の本尊の相は、如何にと云ふに、

壽量品所建立本尊五百塵点劫當初以來此土有緣  
深厚本有無作三身教主釋尊是なり。

此の外本尊の相を示すの祖文繁多かれども、今は  
略す。

我等衆生が「一心欲見佛不自惜身命」の信念を  
以て此の本尊に對する時、爰に初めて十方法界を  
以て身體となし、心性を以て相好となす、妙覺釋  
尊は我等か血肉、因果の功德は骨髓にあらざる乎と  
云ふ、不可思議境に到るあり。此の境地に到りて  
始めて妙法五字の光明に照らされて、本有の尊形  
となり、壽量の當體蓮華の佛ともなるなり。

故に九界も無始の、佛界に具し、佛界も無始の

九界に具す。故に佛に歸依するに、即ち自身あるべきなり。當位則妙ちれば、本位を改めずして、肉身のまゝ本有無作の三身也と云ふの境地は信得すべく識得すべからざるの境界なり。又五百塵点の當初、唯一人の釋尊とは我等凡夫是なりとは本門の從果、向因の法義にして、吾人をして否我等衆生をして、かゝる境界を觀せしむるは之れ則ち本門の本尊の徳用の深勝なるに依るものなり。

——(以下次號)——

## 祖書中に顯れたる攝折二門義門分別

藤田 惠曉、述  
小坂田 龍教、記

若し夫れ人の佛教を學び、世に弘め以て衆生を救濟せんとあらば、須く弘經の方法たる二門を明にするを要す。二門に明かからざれば弘經の方を失す可し。何となれば二門は上釋尊より吾等末輩に至る迄遵守す可き規範なればなり。

今一般の解釋に於ける二門の名義、及び典據等

は略し予は唯祖書中に顯れたる、二門義門分別の一端を次下に述べんとす。

一、祖書中に於ける二門判釋の主判を示す

宗祖上人御遺文中には、二門判釋の書多しと雖も、開目鈔を以て主判となす。然る所以のものは固と是れ二門は、大經と法華經との影互相成によりておれる法門にして、天臺大師是を釋し置かれたり。依て宗祖は本鈔に於て止觀文句、及び疏等を具引して、一般の釋を試み后更に約國約時約機の判以て一大斷案を下し給へり。此れ本鈔を主判と爲し、他書を從判と爲す所以あり。故に今本抄の義門を具引し、他書は是れを基礎として判釋す可し。

開目抄(八二頁)に曰く「夫れ攝受折伏と申す法門は水火の如し、火は水を厭ふ、水は火を惡む、攝受の者は折伏を笑ふ、折伏の者は攝受をかかしむ」

と是れ攝折二門の異目を表示せられしなり。

次に又